

もし私が女性でなかったら

矢口 悦子

もし私が女性でなかったら、手のひらの傷はなかったと思う。小学1年生の5月、学校からの帰り道、体格の良いA君と一緒にいた。国道の脇には、子どもにはちょっと大きく見える小川が流れている。A君はその川を簡単に飛び越えて向こう側に渡った。「君は女の子だから飛べないよね」と言われて、私の負けず嫌いの虫が騒ぐ。思いっきり助走をつけて飛び越えた。しかし、勢い余って両手を前についてしまった。そこにガラスの欠片があって、私の左手には傷ができた。

もし私が女性でなかったら、「女性学長として…」という質問を受けることはなかっただろう。未だに、「学長」は男性が就任するのが一般的であり、女性が学長になっているのは、「何か特別なこと」があるに違いないと想定されている場面にしばしば出会う。それは、政策や方針決定の場に女性たちが少なすぎる現実の反映であることはもちろん、「女性学長」への特別な期待があることも確かである。私は、その期待の中身が何であるのか、質問者の意図を知りたいと考え、こうした機会を活かしたいと考えている。

少し前のこと、学内の行事でSDGsに関わる学生アンケート調査があった。最も関心のあるゴールはどれか、という質問に対して「5: ジェンダー平等を実現しよう」を選択した学生が一番多く、特に女性に顕著だったという。その理由は、「将来に不安がある」というのだ。貧困に生きるシングルマザーやコロナ禍で解雇された非正規労働者に女性が多く、「自分もそうなるかもしれないから」ということらしい。かつて、学生だった私にとって女性問題はその歴史や背景を掘り下げて学び、その克服を目指して改革に取り組む対象であった。21世紀もだいぶ経った今、女性が社会に出ると痛い目に遭うかもしれないという「不安」を抱いている学生がいることに驚きを感じた。

女性も男性も自由に生きられる喜びと期待を抱き、大きく飛び跳ねていけるような社会を学生たちと一緒に作り続けるしかない。



PROFILE

やぐちえつこ：秋田県生まれ。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科（博士課程）単位取得退学。博士（人文科学）。専門は社会教育学・生涯学習論。2003年に東洋大学文学部教授として着任。社会貢献センター長や文学部長などを経て、2020年学長に就任。共著書として『女性センターを問う―「協働」と「学習」の検証』（新水社、2005）、『地域を支える人々の学習支援―社会教育関連職員の役割と力量形成―』（東洋館出版社、2015）等。